

提案の種

A班-物語1

コメント

それは上品な町なかでの出来事
ある日の夕方
私はレトロ調の外灯が並ぶ小道を歩いていた
町全体の雰囲気が
きれいな風つつまれている
美術館のある通りを抜けると
立ち寄りやすい小さな店がある
その店は小さいながらも活気に満ち
外観を見ているだけでも不思議とわくわくしてくる
私はその店に入った、そして
みかんのかおりのする子供と出会った
私はその香りに懐かしさを感じた。
「久しぶりだなあ。」
そういえば私も昔、みかんの皮を剥き過ぎて手が黄色くなり、
お父さんに「お前みかんの香りがするぞ」とよく褒められたものだ。
「- そうだ。田舎に帰ろう」
私はおもむろに車に乗り、田舎の町並みには合わないであろう車の中で
田舎へと続く懐かしい小道を急いだ。
松の木の林をぬけると、そこには
昔と変わらない公園、銭湯、地域住民がいた。
その中にお父さんがいた。変わらない笑顔で私に手を振ってくれている。
「お父さん！」「おーい、みかんがあるぞ」
おしまい

通りは暗いので必要ですね。
電球色の暖かい光だと感じが良
いですね。

学生さんの作品を飾る
そんな美術館もいいですね。

新屋には小道が多いので
何か利用できたらいいのに。

昔、龍八の近くに銭湯がありま
した。懐かしいです。

提案

通りのお店や、空きスペースを利用した美術館はどうでしょう？
夜はそのショーケースの光が街灯がわりになるとか？

提出期限 11月24日(金) 17時まで
提出場所 西部公民館受付